



ピッポ新聞

2006

3

No.207

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

本の価額と表現の自由

拝啓 福音館書店書籍編集部長

大和茂夫 様

「ご無沙汰しております。お元気でいらつしやいますか。季節は冬から春へ移ろう、四季の中でも一番自然の息吹を感じるときを迎えています。そんな中、貴社発行の月刊「こどものとも」が五十周年(600号)を迎えたことをお喜び申し上げます。

一年半ほど前に「大型絵本」についての、ぼくの稚拙な質問にお答えいただいたことをとても感謝しております。

今回再び、大和さんにお聞きしたいことが生じたので、前回同様ピッポ新聞紙上を通じて質問させていただきます。

さて、ここに貴社発行の1冊の本が在ります。当店の在庫です。タイトルは『おいしい野草』です。高森登志夫・え 丸山尚敏・ぶん 1997年4月20日・第4刷と、奥付にあります。定価は1365円(消費税込み)です。この本は貴社の「みるずかん かんじるずかん」シリーズ全20巻の中の1冊です。この『おいしい野草』は現在品切れになっていますね。注文を出しますと、品切れ重版未定であると戻ってきます。貴社の在庫表にも現在は載っていません。

しかし、この『おいしい野草』はあるところでは今も販売されていますね。販売しているのは「こどものとも社」です。この本を本屋が注文した場合は品切れで入手できないにもかかわらず、「こどものとも社」を通じれば買うことができるというわけです。これは一体どういうことなのでしょうが?

貴社とこどものとも社がどのような関係かぼくは知りませんが、興味ありませんが、なぜ一般の本の流通過程では品切れのままにしておいて、こどものとも社の為のみに重版して独占的に販売させているのですか?

こういうのを世間ではインサイダー取引と呼んでいます。もしこれが本ではなく、扱うのが株券であったならば証券取引法違反で両者とも罰せられることは必定ですね。このことは、今世間を騒がせている「ライブドア」問題と相通じるものがあると思っております。

本屋の流通ルートが品切れにしておいて、一方ではこどものとも社だけに独占的に流通させる。これはどうしてなのかまず、お答え願えないでしょうか。

さらに驚くことは、このこどものとも社で販売している『おいしい野草』は定価が1000円(消費税込み)だということです。本屋で売っている『おいしい野草』は税込み1365円です。ですから、こどものとも社の方が365円安いことになりませんが、同じ本でありながら定価がちがうということ、これはいったいどういうことなのでしょうが?これが第二の質問です。

大和さん、なぜぼくが今、こんな質問を公開して持ち出したかをここで少しお話したいと思います。

大和さんは「存じないかも知れませんが、実はこの問題について3年前、今回と全く同じ「みるずかん かんじるずかん」のことで、貴社の販売課に一度質問したのです。

そのときの販売課の回答内容は、値段が異なるのは「紙質が違うから」。独占販売については「注文品だから」ということを主な理由に挙げていました。

ぼくはこの回答ではとうてい納得できませんでした。第一、読者に問われた場合、この回答では説明の仕様がありませんもの。

しかしながら、やりとりの中で多くの問題提起を重大だと受けとめていただいたと認識して、公にもせず矛を収めたのです。

ところが、たまたまこの2月の始め、2005年版のこのとも社のカタログを見る機会がありました。そこにはなんと、この『おいしい野草』が本屋では購入できない本として再び載っているではありませんか。貴社では、多くの問題提起を歯牙にもかけなかったと言うことでしょうか。

ここで読んでくれる方に少し詳しい説明をいたします。このこのとも社が販売しているのは『おいしい野草』1冊だけではありません。最初に書きましたように、もともとこの本は「みるずかん かんじるずかん」全二十巻の中の1冊です。このシリーズは現在でも5冊は流通しています。後の15冊は品切れです。

一方このこのとも社の専売品(福音館が2005年版のカタログによると、「ずかんシリーズ」と題して、四月「ちよう」五月「おいしい野草」六月「鳥のなきこえずかん」七月「こうちゆう」八月「海べのいきもの」九月「虫のかくれんぼ」十月「宇宙のアルバム」十一月「ぼくの家ができる」十二月「ミニチュアでみる世界の台所」一月「クイズどうぶつの手と足」二月「えもじ」三月「じどうしゃ博物館」の12冊を重版しているのです。

大和さん、教えてほしいのです。先程も書きましたように現在「みるずかん かんじるずかん」の5冊は本屋を通じて流通しています。さらに当店では品切れの『おいしい野草』も在庫として店頭に在ります。もし、お客さんに「幼稚園で買ったのは1000円だけど、ピッポで売っているのは何故1365円なの？」と、問われた場合どう答えればよいのですか？

ぼくは自分で調べたからお客さんにそれなりに説明できますが、事情を知らない他の書店はどう答えればよいのでしょうか？書店はこの事実を全く知らされていないのですから。

このことは福音館に対する読者の重大な不信につながりませんか？

ところで、これは再販の法律(?)には違反しないのでしょうか？

それとも、福音館ではこの12冊を再販品から外して、価額自由な本として設定した

のでしょうか？

これらの疑問にお答えください。

大和さん、ぼくはとても心配です。しかし、どうぞ誤解なさらないでください。ぼくは福音館という出版社がその出版内容を含めて好きなのです。ですから、あえて言わせていただくのです。これは読者に対する裏切りではないのでしょうか？

「このこのとも社」は保育業者ですよね、幼稚園や保育園を通じて様々な保育用品を売っていて、その中の一つとして本が在るのです。でも、このこのとも社を通じてこの本を購入することのできるのは限られた人たちだけです。しかも、これらの本を購入する場合には12冊全部を買わなければならないのです。例えば『虫のかくれんぼ』1冊だけの購入は出来ないのです。いわばセット販売というわけです。

福音館は表現の自由ということには、出版社ですからも敏感であると拝察いたします。

ぼくは広義な意味でこの中に、当然、本や新聞などの販売方法も含まれると理解しています。

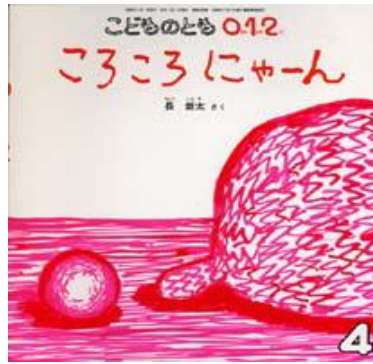
それはいうまでもなく広く読者に公平に読む機会を提供することで表現の自由が確保されると考えるからです。しかし、現在福音館がやっていることは、一保育業者に販売を独占させるということ、出版社自らが表現の自由を狭める行為ではありませんか？ところで、ぼくが不思議でならないのは、

表現の自由を大切にしているはずの出版社で、このことが社内的にいささかも問題にならないことです。
 ぼくは作った本を読者にいかに手渡すかも、とても大切なことだと考えています。

敬白

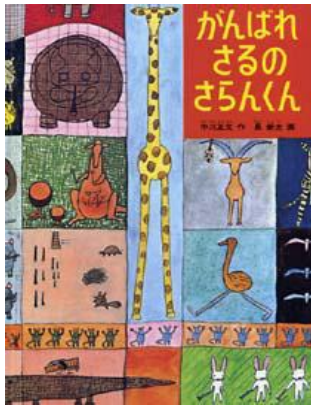
ねー、この本読んだ?

去年、亡くなった長新太さんの最初の絵



本は1958年3月号のこどものとも二十四号『がんばれさるのさらんくん』だそうです。最初の絵本からすでに48年経ったわけですが、この1月にそ

の『がんばれさるのさらんくん』(中川正文・文 780円 福音館書店)が重版されました。



さらに、今月の始め最後の作品であるという『こころにゃーん』

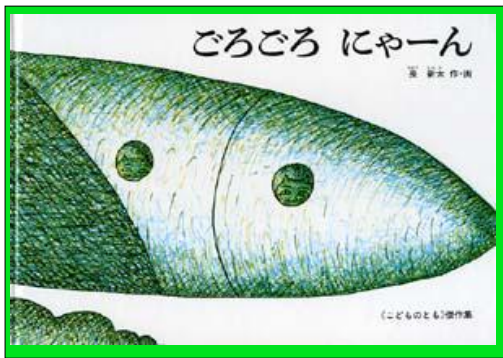
(長新太・作 410円 福音館書店)が

こどものとも012の4月号として出版されました。長さんの最初の絵本と最後の絵本が今、手に入ります。

長さんの絵本の中でぼくが一番好きなのは『こころにゃーん』(長新太・作 840円 福音館書店)です。

実はこの絵本のおもしろさをぼくは、お客さんのTちゃんに教わったのです。たしか彼女が高校生の時だったと思います。だからもう15年は経っています。あるとき店にやってきたTちゃんと、この『こころにゃーん』が話題になったのです。

ぼく「どうして好きなの?おじさんはこの絵本のおもしろさがよくわかんないんだけど」



実はぼくはそれまでこの絵本、長さんの絵本だからと、

何かあるんじゃないかと構えて読んでいて、もう一つ面白くなかったのです。

Tちゃん「だって、これとつても気持ちいいんだもの!」
 ぼく「...?」
 Tちゃん「この

絵本、畳の上に寝転がって目つぶってさ、絵本の場面を想像しながら、こころにゃーん。こころにゃーんって頭の中でつぶやいているとき、とても気持ちがいいんだよ」

これを聞いたぼくは「そうだったんだ!」と、目から鱗が落ちた気持ちになったものです。ぼくも最初から自分の気持ちをニユーtralにして絵本に委ねればよかったのです。そうすれば、長さんの絵本の世界に入れるというわけです。

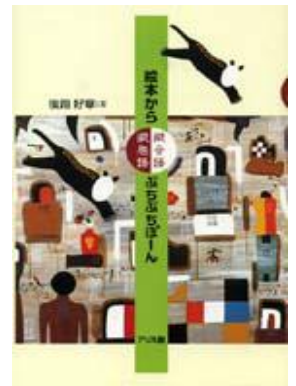
長さんの絵本だからとか、何かあるんじゃないか?なんてコチコチの大人の頭でなんか長さんの絵本を読んだら、絵本(長さん)から拒否されるに決まっています。長さんは子どもの気持ちになにより分かっていた天才的な絵本作家だったのですから。

Tちゃん、おじさんもあれ以来、ときどき目を閉じて「こころにゃーん」ってつぶやいています。今では「長さんの絵本の中では一番好きな絵本です」って、大きな声で誰にでも言えるのに、それを君に伝えることができなく、とても残念です。君が交通事故で亡くなってすでに十年近くたつたのです。今頃は長さんとそちらで出会って『こころにゃーん』と言いついていられるかもしれませんね。

『絵本から 擬音語・擬態語 ぷちぷちぽーん』(後路好章・著 1470円 アリス館)

この本の著者は長年子どもの本の編集者として多くの子ども本を世に送り出してきました。そんな中で、絵本には、何と多くの擬音語擬態語が用いられているのかに注目し、これはある意味で日本語の特徴によるのではないかと推論していき

ます。さらに、日本人が、かなやカタカナ



の文字を生み出したことにより、漢字ばかりの中国と比較して、擬音・擬態語を多く持つことができたのだと言

う。自身の趣味の俳諧にまで視野を広げて、擬音・擬態語に言及していきます。後路さんがこの本でまとめたように、擬音・擬態語を用いた絵本のなんと多いことか。願わくばこれらの擬音擬態語の絵本のテキストと絵との関係をもう少し論じてくれれば、もつとおもしろさが増したのではないでしょうか。

ぼくは静岡県子ども本研究会の会員として、後路さんがあかね書房の編集長であったころより知己を得て二十年以上にもなりますが、後路さんがどんな姿勢で子ども本作りをしてきたのかがこの本を通じてさらに深く知ることができ、その人間性と共に改めて尊敬の念強くしました。この本は「擬音や擬態語」の絵本ガイドブックにもなっています。

『荒野のマークン その受難』(花形みつる・作 やまだないこ・絵 1260円 偕成社)

マークンの家は少々頼りないパパと、家

のなかをすべて取りしきるママの3人暮らしで、まあまあ幸せの暮らしをしていたのです。



ところが、ある夜一人の若い女性が訪ねてきてパパに「私はあなたの子供です」と告げたことから、すべてが狂いだしたのです。ママ

は美家へ帰ってしまい、パパはさらに頼りなさを露呈し、仕事までやめてしまった。そんな中、マークンは案外冷静に物事を見、対処するのだが……。内容は相当深刻で、現代の家庭の危うい状況を描いているわりに、マークンやパパがからつと描かれていて、冷静に読み進めていけるのは、この作者の実力なのか、今風なる故か……。



『リゴニー・ステルンの動物記』北イタリアの森から「マークン・リゴニー・ステルン・グザヴィエ・メーストル・絵 志村

啓子・訳 1470円 福音館書店) 人間にとって自然のなかで思索するとい

うことがいかに必要か、またそのことの素晴らしさを、この十九の短編集は教えてくれる。作品中に、ときに垣間見える前の戦争が人々の心にのこした傷の深さが、いかに平和が大切であるかを思い出させてもくれる。

ミツバチが巣別れするときの描写や、ノロジカを追猟師や猟犬たちの物語など、その観察眼の確かさや、それを表現した素晴らしさなど、この作家の筆力が随所に感じられ、優れた文学作品としての楽しさを思う存分味あわせてくれる作品である。

編集後記

3月の声を聞くと、気持が何だか浮かれてきませんか？実は5日の日曜日、おじさんは久しぶりで駿府マラソンに出してしまったのです。10キロですがね。何故かって？おじさんは、この3月23日に60歳になります。マラソンの申込書を見たら、50歳台と60歳台とでは年齢部門が別れるのです。良く読むと誕生日を基準にと書いてあります。そこでおじさんは考えた「そうだ！これは公式に50代を名乗れる最後の機会なのだ」と、それで俄然出場する気になったわけ。まあ、いたって単純。なんとか完走はしました。浮かれた気持ちは畑にも心を誘ってくれます。スナックエンドウにもそろそろ支柱をたてよう。タマネギには雑草も大分ふえてきたぞ。夏野菜用の空いたところには堆肥を鋤き込もう。忙しくなるぞ！すみません、「神田の古書市」の続きは来月に回しました。